

名大医学部学友時報

2017
10

目 次

1. 中央診療棟 B 棟	 (1)	8. 海外留学体験記	下村 佳寛	 (9)
2. 鶴舞キャンパス地図	 (2)	9. 西医体結果報告	 (10)	
3. 新病院長に聞く	神谷 里明	10. 西医体 上位入賞者報告	 (11)	
4. 医の原点へ＝「ホスピスへの遠い道」	佐藤 健	11. クラブ活動報告	室内合奏団	 (14)
	 (4)		硬式テニス	 (14)
5. 会員寄稿	平野 潤三	12. 人生山あり谷あり	井口 昭久	 (15)
	 (5)	13. 名古屋支部総会のおしらせ	 (15)	
6. 私の旅行カバン	鳥居 修平			
	 (6)			
7. 留学生卒業記念パーティー	木山 博資	14. 編集後記	 (16)	
	 (7)			
	 (8)			



(時報部撮影)

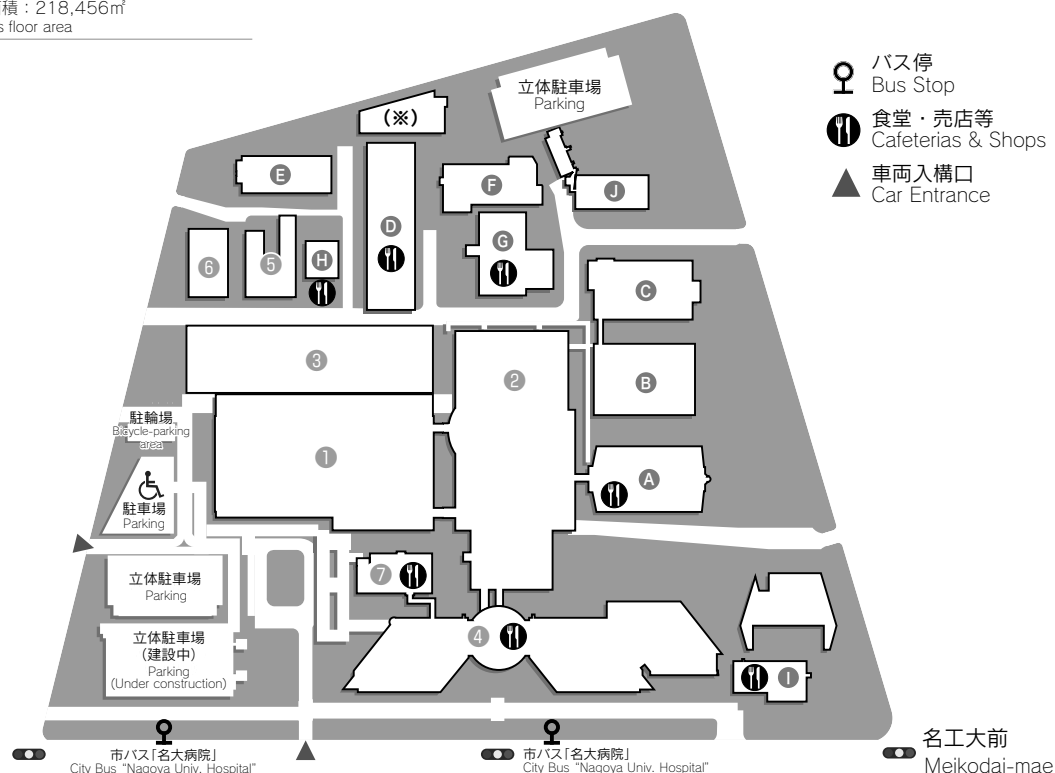
中央診療棟 B 棟

鶴舞地区配置図

Site Map in Tsurumai District

面積 : 89,137㎡

Area

位置 : 名古屋市昭和区鶴舞町65番地
Location 65 Tsurumai-cho, Showa-ku, Nagoya city建物 : 建面積 : 37,465㎡
Building building area延面積 : 218,456㎡
gross floor area

医学部附属病院施設 University Hospital

2017.4.1現在 As of April 1, 2017

名称 Name	構造・階 Structure	建面積 Building area (㎡)	延面積 Gross floor area (㎡)
① 外来棟 Outpatient Building	RC4	5,309	19,446
② 中央診療棟A Central Consultation Building A	SRC7-2	5,881	43,612
③ 中央診療棟B Central Consultation Building B	SRC7-1	2,884	18,315
④ 病棟 Ward Building	S14-2	4,721	52,297
⑤ 看護師宿舎A棟 Residence for Nurses A	SRC10	675	6,158
⑥ 看護師宿舎B棟 Residence for Nurses B	RC6	563	2,741
⑦ オアシスキューブ (福祉施設) Oasis Cube (Welfare facility)	S1	604	595

大学院医学系研究科・医学部施設 Graduate School of Medicine/School of Medicine

名称 Name	構造・階 Structure	建面積 Building area (㎡)	延面積 Gross floor area (㎡)
A 医系研究棟1号館 Medical Science Research Building 1	S13-2	1,493	20,875
B 医系研究棟2号館 Medical Science Research Building 2	RC7	1,515	10,300
C 医系研究棟3号館 Medical Science Research Building 3	SRC10-1	1,474	13,088
D 基礎研究棟 (講義棟) Basic Medical Research Building	RC4-1	1,651	6,585
E 基礎研究棟別館 Basic Medical Research Building Annex	RC5	695	3,158
F 附属医学教育研究支援センター (実験動物部門) Center for Research of Laboratory Animals and Medical Research Engineering (Division for Research of Laboratory Animals)	RC7-1	889	6,488
G 附属図書館・学生食堂 Medical Library / Co-op Cafeteria	RC4-1	974	3,138
H 福祉施設 Welfare Facility	RC3	308	760
I 鶴友会館 Kakuyu Kaikan (Alumni Hall)	RC3	550	1,354
J 旧アイソトープ総合センター分館 (old) Radioisotope Research Center	RC4・RC2	695	1,803
その他 Others		6,584	7,743

(※) ドナルド・マクドナルド・ハウス なごや RMH Nagoya

新病院長に聞く

津島市民病院 院長 かみ や 神谷 さとあき 里明



津島市民病院は津島駅からバスで 5 分ほどのところに位置する急性期病院です。病床数 440 床、19 診療科を有し、海部医療圏で唯一の二次救急病院として地域の医療を担っています。さらに、地域包括ケア病棟、回復期リハビリテーション病棟、緩和ケア病棟も有し、幅広い医療を提供しています。

診療部門

内科（一般、腎臓、内分泌）、消化器科、呼吸器科、循環器科、神経内科、小児科、外科（緩和ケア）、整形外科、形成外科、脳神経外科、皮膚科、泌尿器科、産婦人科、眼科、耳鼻咽喉科、歯科口腔外科、麻酔科、放射線科、リハビリテーション科

平成 29 年 4 月に病院長に就任された神谷里明先生にお話を伺いました。

Interview

—— 病院長就任おめでとうございます。はじめに、今の気持ちをお聞かせください。

正直なところ、大変ですね。10 年間、副院長を務めてきましたが、院長の仕事とは大きな差を感じています。病院の経営や将来構想について、皆で話し合った後で最終的に決断するのは院長の仕事です。さらなる高齢化が見込まれる津島地域のニーズを予見して、病院が今後どうあるべきかを定めることは難しいですし、医療費削減の流れの中で提供したい医療と提供できる医療のギャップに苦しい思いをすることもあります。院長の仕事の楽しさというのは、まだわからないですね。

—— 津島市民病院の特徴を教えてください。

一番の特徴は、地域に根差した公立病院であることです。採算の取りにくい分野であっても、この地域にとって必要な医療であれば維持し提供しなければなりません。

また、津島市民病院は急性期病院として、この地域で発生した一般の疾患は診断し治療したいと思っています。しかしながら、特に高齢者の場合、治療・入院後にどうしても身体機能や ADL が低下してしまうので、患者さんの生活を元に近い状態に戻す必要があります。当院では、地域包括ケア病棟や回復期リハビリテーション病棟を有しており、患者さんと家族が安心して在宅復帰するための仕組みを整えています。

—— 今後の展望や抱負についてお聞かせください。

必要とされる急性期医療はきちんと提供しながら、高齢者がこの地域で自分らしく生きていけるように、医療、介護、予防を担っていきたいと思っています。

当院は訪問看護ステーションを併設しており、在宅医

療にも力を入れています。高齢者人口が増す中で、医師会とチームを組みながら地域全体で連携し、地域の人が安心して最期まで自分らしく暮らせるシステムを作っていくと考えています。また、緩和ケア病棟では悪性腫瘍による疼痛などの症状をコントロールすることで、在宅での看取りも可能にしています。今後も患者さんと家族の希望に沿いながら、終末期を迎える場を提供できればと思います。

—— 卒後研修への取り組みについてお聞かせください。

非常にフレキシブルな研修を用意しています。基本・必修科以外では、自由に研修科の選択ができるプログラムです。さらに 1 学年 6 人なので、指導医とマンツーマンで研修を行うことができます。救急については、年間 4400 台以上の救急車を受け入れており、最前線で経験を積むことが可能です。初めのうちは上級医と一緒にファーストタッチをして診断を行い、徐々に自分で行える範囲を増やしながら力をつけていきます。

専門外の分野では、初期研修での知識と経験が一生の医療知識になります。研修医の先生には、志望する診療科ではない分野に特に力をいれて学んでほしいと常に言っています。

—— 最後に、学生へのメッセージをお願いします。

学生のうちは、遊べる時は大いに遊んでください。医師になると自分の時間が制限されてしまうので、時間を自由に使える学生時代に今しか熱中できないことを悔いのないように思い切りやってほしいですね。

「病気ではなく、人を診る」と言われるように、医師は人を相手とした仕事です。患者さんを理解するために、常識や社会的知識が求められます。広い知識を得るためには、勉強だけではなく遊びも必要だと思うので、おもしろいと感じることがあったら一生懸命に取り組む、人間としての土台を作ってもらいたいです。

（インタビュー：平松 成美、小西 なつの）



津島市民病院

医の原点へ＝「ホスピスへの遠い道」年間入院患者数日本一の緩和ケア病棟を実現して

国立病院機構豊橋医療センター

さとう けん
佐藤 健

国立病院機構豊橋医療センターに緩和ケア病棟（ホスピス）を設置して12年が経過しました。2016年度年間入院患者数は689名で日本ホスピス緩和ケア協会加盟324施設（全国平均187.2名）の中で2年連続の日本一となりました。ちなみに2位は福岡の栄光病院で565名。300名以上の施設は全21施設で、多くはホスピスとして歴史を持つ有名な施設や、国立や県立がんセンターの緩和ケア病棟が名を連ねています。その中で他を引き離して一位となった施設が豊橋にあることを、学友会の皆様に紹介させていただきます。

私とホスピスとの出会いは、1996年に名古屋国際会議場で開催された第21回日本死の臨床研究会年次大会（大会長は私の第二外科時代の恩師である渡辺正先生）でした。1991年名大第二外科癌研究室から当時の国立豊橋病院外科に着任し、癌の手術中心に外科診療を行っていました。その後豊橋ホスピスを考える会の皆さんと出会い、彼らと共に日本死の臨床研究会に参加しました。まだ愛知県にホスピスが一つもない頃でしたが、国際会議場を一杯にするほど多くの医療者や一般市民が集まったのです。その時感じたホスピス運動の強いエネルギーが私を「ホスピスへの遠い道」に突き動かしていったのだと思います。

それから地域で「豊橋ホスピスを考える会」と共に「癌の緩和医療定期公開学習会」はじめ多くの講演会を行うようになり、学校や病院、商工業会議所やロータリークラブなど地域の諸団体からの講演依頼も増えてきました。そして「豊橋ホスピスを考える会」の中で署名をやらうと声が上がリ、当時の厚生省に国立病院にホスピス設置を求める署名が開始されました。当時の新聞には毎日のように署名活動のことが掲載され、同時期に豊橋市議会でも全会一致で新国立病院にホスピスを求める決議が採択されたのです。結果13万を超す署名が集められ、当時の厚生省に届けられました。そして当時の国立豊橋病院と国立療養所豊橋東病院が統合してできる新病院・豊橋医療センターのホスピスが実現したのです。

2005年3月に豊橋医療センターは開院し、24床で緩和ケア病棟はスタートしました。ホスピスは入院したら、死ぬまで出られない所といった誤解も強いので、当院では3つの入院（①最初の入院、症状コントロールの入院：最初にホスピスケアを体験するために ②休息の

入院：レスパイトケアの入院 ③お別れの時が来るまでの入院：看取りの時）という方針を打ち立てて、入退院を繰り返すという運営方法をとりました。ホスピスは死ぬ直前に来る所ではないということを強調したかったのです。当時のホスピスの取り組みとしては画期的であったと言えます。そして「患者を待たせない、選ばない、差別しない。」を基本に、救急入院も受け、周辺医療機関の信頼を得て、入院患者数は年々増えていきました。

この間、講演会も数多くこなしていきました。名大でも学生に「ホスピスでのケアについて」という講義を毎年続けています。東京で講演をした際に新潮社の出版部長が聴きに来ていました。その後彼が編集者と二人で豊橋を訪ねて来られ、本を出さないかと勧められました。「緩和ケアでがんと共に生きる（新潮社）」と新潮文庫になった「ホスピスという希望」の2冊が本になりました。2004年と2014年に2回の「生と死を考える会全国協議会全国大会（豊橋）」と2009年の「第33回日本死の臨床研究会年次大会（名古屋）」でホスピス関係の全国大会長を私は3回もさせていただきました。これらを通じて当院ホスピスを全国にPRできました。

こうして年々患者は増え、2015年3月に24床から2病棟48床へと増床。さらに患者は増え年間入院患者数は2015年度、2016年度と連続で日本一となったのです。数が日本一と言っても質も日本一だと偉そうなことをいうつもりはありません。より地域で信頼されるホスピスを目指してこれからも頑張っていきたいと思っています。そして多くの学友の皆様にホスピス緩和ケアについての理解が広まることを願っています。



国立病院機構豊橋医療センター緩和ケア病棟 庭園
弓張山地を望む